# 川上 高司 ブログ アーカイヴ

## 2016年

### 5月4日

**深い分裂を生んだそれぞれの大統領予備選挙**

5 月 3 日、インディアナ州の予備選挙で共和党はトランプが圧勝、民主党でもサンダースが勝利した。トランプもサンダースも出馬当時は泡沫候補として誰もが最後までレースに残るとは考えていなかった。その両者が予備選挙で勝利を重ね、トランプは共和党の候補に王手をかけサンダースはクリントンを脅かす。今回の大統領選挙はまさに「あり得ない」がアメリカらしい展開となっていて目が離せない。

共和党では超保守派のクルーズが善戦していた。反トランプの動きが活発になり一時はクルーズが優勢になるかと思われたが、流れが変わったのは 4 月 26 日のミニスーパーチューズディだった。ここでトランプはペンシルバニアなどの大きな州で圧勝し勢いを取り戻し、インディアナの勝利で王手をかけた。この結果を受けてクルーズは撤退を表明、トランプの共和党候補指名はさらに可能性が高まった。インディアナの予備選挙はターニングポイントとなったといえる。

インディアナ予備選挙の出口調査を見るとトランプを支持する層が拡大しているのがわかる。超保守派以外はこぞってトランプ支持をしているのである。3 月の時点では若者や女性には人気がなかったトランプが、インディアナでは年齢、性別、学歴や収入に関係なく支持を得ている。しかもトランプには型破りであることだけでなく大統領としてのふさわしさをも期待するというのである。

一方、民主党でもサンダースがインディアナではクリントンを制した。民主党は票を得票率に応じて配分するのでサンダースとクリントンの差は劇的に埋まることはない。クリントンの勝利はほぼ確実である。だが、民主党内ではサンダース支持とクリントン支持とに深く分裂していることがますます鮮明になっている。今後ワシントンエスタブリッシュメントに不満を持つ層が、民主党といえでもクリントンに票を入れるかどうかは不明である。クリントンに入れるくらいならトランプに入れるという行動に傾くとクリントンは本戦でも厳しい戦いを強いられることになる。

一方、共和党や超保守派の間ではトランプ不支持は根強い。トランプに入れるくらいならクリントンを支持すると公言する共和党幹部もいるほどだ。そうなると共和党からクリントンへ票が流れる可能性がある。本戦はまったく予断を許さない。〈br〉

今回の大統領選挙はリベラルと保守の戦いではくくれない。むしろ格差に源を発する現状打破派とエスタブリッシュメントの戦いであるといえる。アメリカの 2 大政党政治が大きく揺さぶられる大統領選挙となりそうだ。

### 5月6日

**次の話題は副大統領候補**

5 月 3 日のインディアナ州の共和党予備選挙でトランプが圧勝したが、まだ必要な代議員数には届かない。だが 3 日の結果を受けて共和党保守派のよりどころであったクルーズが撤退を表明しトランプが大統領候補に指名される可能性が高まった。翌日にはケーシックも撤退を表明しトランプが共和党大統領候補となることは、最後の大票田のカリフォルニア州の予備選挙を待たずして確実となった。

トランプが大統領候補となることがほぼ確実となると次の関心ごとは副大統領候補である。クルーズの敗因は副大統領候補にヒューレット・パッカードの元ＣＥＯであるフォーリナーを指名したことである。それが超保守派に嫌われ、福音派がクルーズから離れてトランプに票が集まってしまった。そもそも大統領候補に指名される前から副大統領候補を指名するということが異例なのである。

ではトランプはいったいだれを副大統領候補に指名するのか、型破りなだけに全く予測がつかない。考えられる人物を挙げてみると、まず大統領指名レースを争ったオハイオ州知事ケーシックが無難なところだ。下院の予算委員会委員長を務めたこともあり経験重視でいくならケーシックだろう。オハイオ州での支持も強い。だがその無難さを嫌うトランプだけにケーシックと組むことは可能性としては低い。

ニュージャージー州知事のクリス・クリスティーはトランプと似ている部分もあり、ウマは合いそうだ。だが外交やワシントン政治の経験は不足しており経験不足のトランプを補うことにはならない。同じビジネスマンであるハーマン・ケインも考えられるが、やはり経験不足である。他にもベン・カールソンやポール・ライアンも考えられるが、トランプの強烈すぎる個性とワシントンの政治の経験不足を鑑みるとしっくりこない。

一方で現実的な思考の持ち主でありビジネスマンであるトランプゆえに副大統領には経験に富んだ人物を起用し、周囲を固める可能性も高い。トランプはその自由奔放な言動で物議を醸し出しているが、社会や国民の動向を案外しっかり見極めている。副大統領候補を誰にするのか、そこにトランプの真の顔が見えてくる。

## 5月14日

### 大統領選挙とシリア

オバマ政権は、内戦が始まってから一貫してアサド大統領の退任を要求してきた。しかし、今では退任を要求することは非現実的であり得ないというムードが漂っている、とオバマ政権で外交政策の上級アドバイザーを務めていたフィル・ゴードンは内情を明らかにした。ゴードンは今ではクリントン陣営の外交政策チームの一員となっている。ゴードン自身はアメリカが軍事介入しない限り内戦は終わらないだろうが、アサドの退任は現状では封印すべきであると考えている。

民主党のクリントンはリベラル・ホークであり、国務長官時代からシリア反政府側への軍事支援の拡大を強硬に主張してきた。クリントンが大統領に就任したら、今進行中の平和交渉が断絶する可能性もある。昨年 12 月には反政府側への支援の拡大に言及している。 しかもクリントンの外交政策チームはゴードン以上に強硬姿勢である。アサドの退任で妥協することは反政府側だけでなく長年の盟友であるサウジアラビアやカタールを怒らせることになるから、妥協するべきでないというのだ。

いまやアメリカのシリア政策はアサド問題よりも IS を殲滅させることに重点が置

かれている。ケリー国務長官もアメリカの目的は IS の打破だと公言してはばからない。国家の体制を破壊して新たに構築することはアメリカは長きにわたって多大な犠牲を覚悟しなければならないが、世界の警察官から降り新孤立主義を貫くオバマ政権がそのような重責を引き受けることはあり得ない。

大統領が交代すれば話は別である。たとえ同じ民主党のクリントンであっても外交政策が転換する可能性はあるし、共和党とはいえトランプがオバマの外交政策を引き継ぐかもしれない。シリア政策に関して言えばクリントンは強硬派であるがトランプは関与を否定しており、クリントンとトランプの外交政策は真っ向から対立する。次の時代にアメリカはどう世界と関わっていくのか。世界にとっても無関心ではいられない、重要なテーマである。

5月18日

## ますます内向きになるアメリカ

オバマ大統領が「世界の警察官から降りる」と宣言してその言葉通り孤立主義を貫く外交政策を展開してきた。いよいよ任期が迫り、大統領選挙が盛り上がってきているが次期大統領がアメリカの立ち位置をどう考えているのかは気になるところだ。

そのオバマの外交政策に近いのが意外にも共和党候補のトランプである。彼はアメリカだけが負担を背負う必要はないとやはり世界の警察官を否定しているのである。

世論も、世界には係わるべきではないと考えている。ピューリサーチセンターの 5 月の世論調査によれば、国民の５７％が「アメリカはアメリカのことだけを考えていればよい」と答えている。「他国の問題に関与すべき」と考えているのは３７％にすぎない。それは経済分野でもあてはまる。「アメリカが世界経済に関与しすぎだ」と答えたのは４１％、「ほどほどでよい」と答えたのは２８％、「関与が足りない」と答えたのは２７％に過ぎない。「世界経済に関与することを支持する」としたのは４４％、逆に「支持しない」と答えた国民は４９％と、経済面でも国民は内向きになっている。

そして次期大統領は「国内政治を最優先すべき」と考えている国民は７０％、「外交に力を入れるべき」と考えている国民は１７％にすぎない。アメリカ社会全体が内向きで孤立主義化しているのである。

ここにトランプ人気がある。トランプは国民のこのような傾向を読み、アメリカ最優先の極端な政策を掲げて人気を博してきている。民主党でもサンダース旋風に象徴されるようにアメリカ国民は遠いシリアの問題よりも自分の生活する場所のことを考える政治を望んでいる。言い換えれば理想より現実優先なのである。

かつてヨーロッパから新大陸へ移民を率いて渡ったウインスロップは、アメリカは「丘の上の街」であると説いた。丘の上にある街は誰もが見ることができる。衆人の目に常に晒されている街は人々の「理想の街」を目指さなければならない。つまり新大陸のアメリカは、世界の「理想の国」とならなければならない。それがアメリカに課せられた使命である。以来アメリカは世界の「理想の国」となる使命を背負ってきた。

だが、世界は大きく変わった。アメリカも変わった。もはやアメリカが「丘の上の街」である必要はない、普通の人々でいいのだとアメリカ国民は考え始めている。今年の大統領選挙は、アメリカの理想をこの先も背負うのか放棄して普通の国になる

のかを問う重大なターニングポイントとなる。